

人権が守られる未来に向けて

中 二

私は人権作文を書くにあたって、人権問題について調べてみました。子供、高齢者、障害のある人、外国人への人権侵害など他にもまだまだたくさんありました。私は、小学生のころから毎年人権作文を書く機会がありました。これまで疑問をもたずに書いてきましたが、こうしてずっと続いているということは、ずっと人権問題が多くあり続けているということなのでしょう。この機会に私は、人権問題を減らすにはどうしたらよいのか考えたいと思いました。

私の弟は生まれつき弱視で盲学校の小学部に通っています。今まで弟のことで、偏見を受けたり差別をされたりしたことがあるか、母に話を聞いてみました。幼稚園に入れるか園に聞いたところ返事をもらえなかったことや、分厚いレンズのせいで目が大きく見える眼鏡をしていたため、毎日のように友達からかわれられて弟が悲しい気持ちになっていたことなどを聞きました。他にも、盲

学校の高等部のお母さんたちからは、大学受験をしたくても受験させてもらえなかった話や、就職活動中に、目が見えない、見えにくいと伝えると断られることが多くて仕事を見つけられず大変だという話を聞いたそうです。テレビのニュースにはならなかったけれど、私の近くでも人権問題は起こっているのだと気付かされました。

私が悲しい顔をして聞いていると母が、「でもこの前、嬉しかったことがあったよ。」と話してくれました。ある日、聴覚障害のある主人公のドラマを母と弟が見ていたそうです。そのときの内容が、耳が聞こえず辛い思いをしている主人公と笑顔をなくしていく家族というような悲観的な話で、母は弟に見せていいのか心配になったそうです。その日、寝るときに弟が、

「でも、あの人は聞こえないけど、目は見えるじゃない？ 歩けるし、ご飯も食べられるし。俺は見えにくいけれど聞こえるし、歩けるし。できないこともあるけれど、できることもたくさんあるから俺は別に俺でいいな。」

というようなことを元気に言っていて、母はその言葉がとても嬉しかったし、頼もしかったと話し

てくれました。私もその話を聞いて、「かっこいいじゃん！」と思いました。弟は普段、拡大文字の教科書やタブレットを使用して地域の小学生と同じ勉強をしています。また、夕飯のおかずは何があるかはよく見えないので、誰かが「このお皿はお肉とピーマンの炒め物で味噌汁の中身はじやがいもとワカメだよ。」などと教えます。弟は、自分で努力したり、工夫したりして、できることは色々々と挑戦しています。できないことは聞いて手伝ってもらっています。そして、自分では変えられないところ（例えば、弟の場合は視力）は「それが僕（私）。」と自信をもって生きています。それがかっこいいと思いました。

障害者のできることでできないこと。

子どものできることでできないこと。

高齢者のできることでできないこと。

外国人のできることでできないこと。

どんなことができて、どんなことができないかは一人一人違います。できたりできなかったり、でこぼこしています。それはまるで、一人一人がパズルのピースみたいだと思いました。パズルのピースは、色々な形があつて、飛び出していたり

へこんでいたりするけれど、どれもが必要なピースです。私も、「もつとこうだったらいいな」と思うこともあります。工夫すれば変えられるところは努力し、変えられないところは、「それが私というピースの一部なのだから」と自信をもって生きていく、そう考えると、とても前向きで優しい気持ちになりました。

そして、自分自身のピースも大切にすること。家族や友達、地域の人たちのピースも大切にすること。その両方が必要だと思いました。一人一人が必要なんだと一人一人が、人権問題は今より少なくなるのではないかと考えました。

四月から始まった自転車のヘルメット着用の努力義務のように、自分のピースも他人のピースも大切に努力義務を一人一人が意識すれば、人権が守られる人は増えていくのではないかと思います。私が大人になったときには、自転車に乗る人が当たり前前にヘルメットをしていて、「今はあまりないけれど、何年前は人権問題というのが多かったんだよ」と語られるようになっていくことを願っています。